

Primula flagellaris W.W.Sm. is a very small tufted plants with a short rhizome and white-farinose rosulate leaves and calyces, and well distinguished from other species in sect. Minutissimae Pax in having long leafless flagellate stolons terminated in minute young leaves. Though it has been known from east Himalaya (Sikkim and Bhutan), Mr. Toshio Yoshida, a plant photographer, found it in Ganden - Samye, alt. 5000 m in east Tibet on 12 July 1997 (Fig. 1). *Primula tenella* King ex Hook.f. has stolons also. These two species are distinguished by the presence or absence of bracts; *P. flagellaris* is ebracteate. The stolons of *P. tenella* are, however, leafy and seems to be rather oc-

casional.

Smith and Fletcher (1942) wrote: "As noted in the field by Ludlow and Sherriff, *P. flagellaris* begins formations of the stolons in early August as the fruits ripen." A photograph taken by Mr. Yoshida indicates the stoloniferous reproduction beginning at the flowering stage already.

参考文献

Smith W. W. and Fletcher H. R. 1942. The genus *Primula*: section Minutissimae. Trans. Bot. Soc. Edinb. 33: 227-266.

(^a Department of Botany, University Museum, University of Tokyo, Tokyo 113-0033 東京大学総合研究博物館, ^b Department of Botany, National Science Museum, Tsukuba, Ibaraki 305-0005 国立科学博物館植物研究部)

キジムシロ属の新帰化植物、ハイキジムシロ（新称）（勝山輝男，田中徳久）

Teruo KATSUYAMA and Norihisa TANAKA: *Potentilla anglica* Lichard, Newly Naturalized in Japan

神奈川県植物誌調査会の吉川アサ子氏が、横浜市都筑区茅ヶ崎中央の宅地造成地内の空地で、イヌムギやキゾメカミツレ、アカツメクサなどとともに、見慣れないキジムシロ属植物が生育しているのに気づき、標本を採集された (Fig. 1). 帰化によるものと考え、手許にあるヨーロッパやアメリカの植物誌や図鑑類を調べたところ、ヨーロッパ原産の *Potentilla anglica* と判明した。和名をハイキジムシロと新称し、日本新産の帰化植物として報告する。今回採集された標本をもとに、以下に特徴を記す。

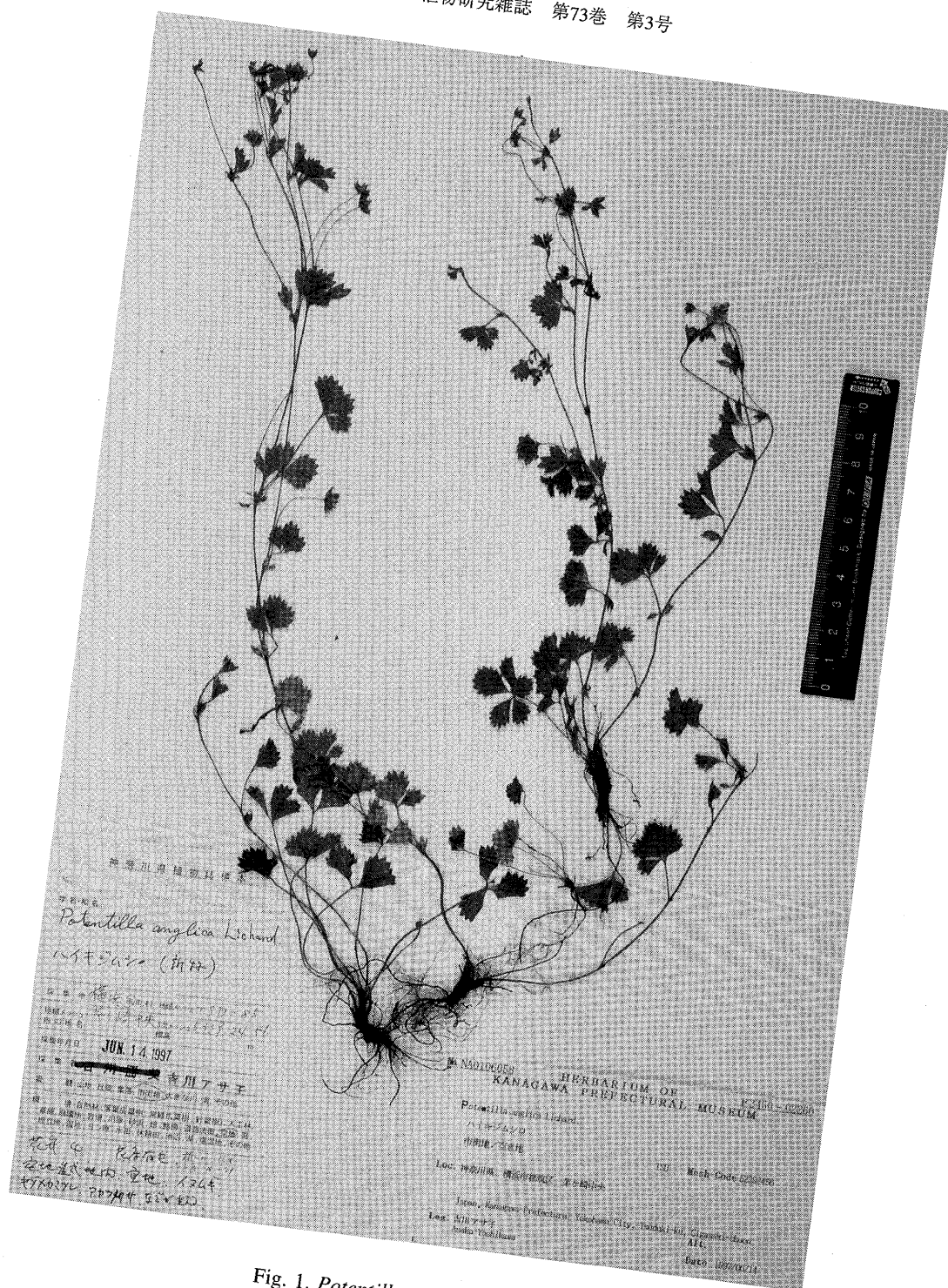
多年草で、茎は地面をはって長く伸びる。根生葉は5小葉からなり、3-8 cmの柄があり、花時にも残る。小葉は倒卵形で、長さ5-15 mm、幅3-10 mm、先は円く、上半に3-6対の鋸歯があり、両面に白色の長伏毛がある。茎葉は下部のものは1-2 cmの柄があり、5小葉からなり、上部のものは、柄が短く、3小葉からなる。托葉は披針形で、長さ3-8 cm、全縁または2-3個の歯牙がある。花は葉腋に1つずつつき、細長い柄がある。がく片は4個で、卵形-披針形、副がく片はやや幅が狭く、がく片と同長である。花弁は黄色で4枚、倒卵形で長さ5-6 mm。雄しべは16

本、心皮は14-21個、花床は有毛。そう果は卵球形で平滑、長さ約1.5 mmで、花柱は落ちやすい。

Tutin et al. (1964) や Clapham et al. (1987) に詳しい記載が、Bonnier and Douin (1990) や Blamey and Grey-Wilson (1989) にカラー図版が載っている。なお、Bonnier and Douin (1990) や Gleason (1952) では、学名に *P. procumbens* Sibth. が使用されている。英名には Trailing Tormentil, Trailing five-finger, Creeping cinquefoil などがある。

P. anglica は、4弁のものが多く、時に5弁のものが混じるというが、今回採集された標本はすべて4弁のものであった。*P. anglica* に近縁のものは、ヨーロッパに *P. erecta* と *P. reptans* がある。*P. erecta* は、葉が3小葉からなり、子房が数個と少なく、*P. reptans* は、葉が常に5小葉からなり、花弁は5枚、子房は20-50個と多い。これらの種間には雑種が形成され、その雑種は *P. anglica* によく似ているが、結実しないという (Tutin et al. 1964)。今回採集された標本では果実がよく実っており、雑種の可能性はない。

P. anglica は、ヨーロッパに広く分布し、北アメリカやニュージーランドに帰化し、牧草

Fig. 1. *Potentilla anglica* Lichard.

地の雑草となっている (Gleason and Cronquist 1991, Webb et al. 1988). そう果の大きさがシロツメクサやアカツメクサなどのマメ科牧草の種子に近く、これらの種子に混入して侵入したものと考えられる。日本には、同様にして、緑化用の種子に混入して帰化したのではないかと思う。なお、証拠標本 (KPM-NA0106057 横浜市都筑区茅ヶ崎中央 1997年6月14日 吉川アサ子) は、神奈川県立生命の星・地球博物館 (KPM) に収める。

最後に、標本を採集して頂いた吉川アサ子氏に感謝の意を表します。

引用文献

- Blamey M. and Grey-Wilson C. 1989. *The Illustrated Flora of Britain and Northern Europe*. 544 pp. Hodder & Stoughton Ltd., London.
- Bonnier G. and Douin R. 1990. *La Grande Flore en Couleurs de Gaston Bonnier*, Vol. 1. 25 pp. + 467

- pls. Institut National de la Recherche Agronomique, Paris.
- Clapham A. R., Tutin, T. G. and Moore, D. M. 1987. *Flora of the British Isles*, Third Edition. xxviii + 688 pp. Cambridge University Press, Cambridge.
- Gleason H. A. 1952. *The New Britton and Brown Illustrated Flora of the Northeastern United States and Adjacent Canada*, Vol. 2. iv + 655 pp. New York Botanical Garden, New York.
- Gleason H. A. and Cronquist A. 1991. *Manual of Vascular Plants of Northeastern United States and Adjacent Canada*, Second Edition. 1xxv + 910 pp. New York Botanical Garden, New York.
- Tutin T. G., Heywood V. H., Burges N. A., Valentine D. H., Walter S. M. and Webb D. A. (eds.) 1964. *Flora Europaea*, Vol. 2. 469 pp. Cambridge University Press, London.
- Webb C. J., Sykes W. R. and Granock-Jones P. J. 1988. *Flora of New Zealand* Vol. IV. 1xviii + 1365 pp. New Zealand Botany Division, Christchurch.

(Kanagawa Prefectural Museum of Natural History
神奈川県立生命の星・地球博物館)

新刊

□デービット・アッテンボロー (門田裕一監訳・手塚 薫, 小堀民恵訳): **植物の私生活** (David Attenborough: **The Private Life of Plants**) 320 pp. 1998. 山と溪谷社. ¥3,200.

植物の生活を詳細に記録し、テレビでの放送での放映でよく知られる著者が、植物の様々な生活の様子を纏めたものである。内容は、旅をする植物たち、植物の養分調達システム、花たちの花粉輸送大作戦、植物たちの生き残り作戦、植物たちの多彩な交遊録、極限の世界を生き抜く植物たち、の項目にわけて纏められている。

それぞれの項目では、多くの小項目にわけて、いろいろな植物が独自の方法を編み出して生活している様子が、見事な写真と共に解説されている。旅をする植物たちの項目では、植物の領土拡大戦術、身軽な種子は旅の達人、自力で種子を散布する植物たち、風に乗って旅する種子の飛行装置、羅針盤はないけれどはるばると海を渡る種子、鉤爪やトゲを駆使して動物に便乗する種子、種子の運び屋に美味しいごちそうを提供する植物、果物のにおいては効果的な広告テクニック、動物の

消化管を通らないと発芽できない種子、種子の運び屋がいなくなったら?、毒で身を守る種子とコンゴウインコの知恵比べ、隠した種子を忘れてしまうアグーチとホシガラス、長い眠りからさめた種子、の小項目に分け、具体的な植物を例にあげて説明している。例とされる植物は日本で知られている種類もあるけれど、多くは外国の植物である。しかし同じような行動をする植物が日本にもあるので、それを想定するのも興味ある問題を提供してくれる。他の項目も興味ある小項目のもとに解説されている。また解説は藻類や菌類にも及んでいる。

これまでいろいろな生活をする植物は知られているが、これだけ纏めて様々な角度から紹介したものは知らない。植物は動物に比べて動きが少なく、一つの場所に花を咲かせて種子を作って繁殖する、といった程度の知識しかない多くの人にとって、植物にもこれだけの生活戦略があるのかと驚かせる内容である。また戦略として使っている部分の美しい写真を見るだけでも楽しいし、教育の上でもすぐれた本である。(山崎 敬)